

---

# どえむどうし

白日朝日

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

どえむどろし

### 【Nコード】

N2753Y

### 【作者名】

白日朝日

### 【あらすじ】

生粋のDMである主人公がDSと勘違いされてDMの女の子に「ご主人様になつてください」宣言をされることからはじまる性癖すれ違い恋愛SMコメディです。

## 第一話「俺の小日向まなみさん」(前書き)

行きあたりばったりで更新してゆくの更新ペースは不定期ですがお付き合いいただけるとさいわいです。

## 第一話「俺の小日向まなみさん」

小日向まなみさんはクールビューティである。

地球開闢以前からそうだったかのように、世界を定義付けるただひとつだけの数式みたいにぶれることがない。

小日向まなみさんは俺の理想の女性である。クラスでも成績優秀文武両道品行方正で中等部生と比較してもやや小さい身長を除けば非の打ち所はまるでなし。その上、クラス委員としてくださす指示も的確で彼女がクラスに与える叱咤は常に俺を鼓舞する。

鼓舞する、というか正確に言くと快感なんだけど、つまり俺はいわゆるところのドMという人種らしい。そう気づいたのはここ数ヶ月の話。

取りあえず小日向まなみさんは俺にとって理想の女王様である。

……そう思っていた。つい五分前まで。

「大森くんに、訊きたいことがある」

今日の昼休み、まなみさんは冷えた声で俺に話しかけ、その声色に俺はぞくりとした。

今にも「ありがとうございます」と叫びたい気持ちを抑えながら俺は冷静な対処を心がける。引かれてしまつては元も子もない。まなみさん女王様計画（MJK）はさながら光源氏のごとく周到に行われなければならないのだ。

「なに？」

精一杯のポーカーフェイス。普段からあまり表情を動かさすほうじやないから得意といえれば得意なのだけど、この場面で貫き通すのはなかなか難しい。昼休みの廊下、人通りは多く、有名人の彼女に話しかけられたとあつては注目を浴びずにいられない。よくわからないう期待もあるのだけど頬がゆるむことはない。むしろ俺を支配するのは緊張感だ。手先を少し動かすのもなにかを悟られそうで怖いよ

うな、そんな。

ああ、でも手を動かしたりして今の気持ち読み取られて言葉で責められたらどうなんだ……ご褒美なんじゃないかそれは。御恩と奉公の時代に生まれていたのなら、奉公の結果に罵倒を求めているだろう俺だ。むしろここは少しの可能性にベットして、悦楽園を狙いに行くべきなんじゃないか？

「そうだね。ここじゃあ人が多いから、10分後でいいから部室棟の前で合流したい」

まなみさんは告げる。

「わかった」

俺は簡潔に答える。学校内で女子から呼び出されるイベントなんだから、そりゃあ多少の期待は抱いてしまう。けど、それは表に出せない。

「じゃあ、おねがい」

彼女も最低限の言葉だけ述べると回れ右をするようにぴしっと踵を返し、廊下の奥へと去っていった。まだ高い日差しが窓辺に少しだけのひだまりをつくる。その光に照らされながらも一度だけこちらを確認した彼女の横顔が美しく、俺は動きを止めたまま見とれてしまっていた。

ああ、マイガッデス。どうか、俺の、最高の女王様になってくれますように……

そんなことを考えながらたどりついた部室棟前。

砂埃立つグラウンドの近くにあるため昼休みでも人の姿はあまりない。だからまなみさんを部室棟前に見つけるのは早かった。10分後と彼女は言っていたけれど、俺と同じくすぐに待ち合わせ場所に向かったらしい。まなみさんは俺の姿を認めるとちいさく手を挙げた。ああ、やっぱり綺麗だな。

身体に少し貼りついた緊張を引き剥がすよう少しだけ大げさな動きで歩いて彼女の元へ。

「来てくれてありがとう」

「ああ。ところで、話したいことがあるみたいだけど……」

こちらから切り出す。急かすようではあるけれど焦っているつもりはない。ただ、きちんと用件があると把握しているアピール。そういうのを挟むだけで会話の流れはスムーズになると体感で知っている。

「うん……その件だけだね」

はて、と思う。まなみさんのことを比較的多く見てきた自信はあるけど、こういう風に言い淀むことはあつただろうか。いつも簡潔で的確。流鏑馬での真ん中に矢を射るような会話をする女の子だと、俺は思っていた。やつぱりこれいわゆる彼氏彼女の告白なんじゃないのかこれおい。

「どうしたの？」

「えっと……。聞いて引いたりしななくなつて、すこし不安」

ややうつむき加減の顔を上げ苦笑いするまなみさんの顔には緊張がみえる。とにかく明確にレアな表情。この顔の彼女を好きになつたわけじゃないけれど、特別な顔を見るということはけっこううれしい。

「いいよ。たぶん大丈夫」

彼女の言葉を促すことにした。俺とてDMという属性持ちだ。そうそう人の言うことで驚いたり引いたりはしない。

「あの、さ……大森くんは、ばとうつて好きな方？」

ややたどたどしく小さな声で質問するまなみさん。その予想外の内容に『罵倒』という変換候補がサジェストされた。いや、まさか。ここは、冷静に。

「えっと。観音？」

「ちがう」首を振る。

「スーホの白い馬」

「馬頭琴でもない」

他に浮かんだ選択肢がすべて消える。

「えっと、他をよくしらないん、だけど……」

俺も動揺がはじまったのか舌がうまく回らなくなってきた。まさか、まなみさんに俺が罵倒されたいことを見抜かれた？ だとしたらどれだけSの才気に溢れているかという話だ。

「あの、人を罵る方の……罵倒」

ストライク、バッター、アウツ。変な脳内音声が響いた。

質問の意図は分からないけど、まなみさんに俺のMっ気が見抜かれたことは間違いない。

ならばもうMJK（まなみさん女王様計画）は一旦情熱の火にくべて可能性にベットする。

「あ。いや、ごめん。この質問、やっぱりおかしい。ごめん、できたら聞かなかったことで……」

赤面し尽くすようなまなみさんの前で、胸は張れないけど、俺も真実を告げることに決めた。

「あの、いや、合ってる。俺は好きだよ。罵倒」

「だから今すぐ罵ってください」という言葉は喉の奥にギリギリで引っ掛けた。

「じゃあ今すぐこの……」

違う。俺じゃない。この言葉を発したのは俺じゃない。まなみさんだ。

「あー、ちがう。あの、えーと……あの、罵倒好きなんだよね。じやあ、わたしのごしゅっ……いまのも、ちがう……」

ゴシユってなんだ。しかしさつきから完全に様子がおかしい。照れているような慌てているような、この状態は俺の知る小日向まなみさんでは全くない。

「あーもういいや、えっと、ご主人様になってわたしを罵倒してくださいー！！」

おもいつきり頭を下げられた。えっと、これって、告白？

告白にしても、これ、え……えー……。

「いみが わからない」

口からエクトプラズムの質問が漏れた。

「だから、いつも大森くんって冷静で眼鏡で、罵倒が好きそうな人間だなんて思ってた、それでいいなって、思ってたの。いつか、この人に罵りたいなって。そんな」

言葉につまづきながらも真意をきちんと話してくれる彼女に、押されながら俺は……

「まずはともだちから はじめていいですか？」

なかばオートに無難な言葉を返すこととなった。無感情で。

「……！」

まなみさんが頭を下げたままぞくりと震えていた。なんか正直すこしだけ怖かった。

遠くから鐘の音が響く、ああこれが予鈴だと気づくのにはずいぶんと時間がかかった。

「えっと、じゃあ先に教室、行くから」

晴れ晴れとした彼女は、浮かれ気味に去っていった。

その様子を見て普通にご主人様の座に就くより彼女を満足させてしまったのではないかと不安に陥る。

俺の経験則が正しければおそらくその予感は的中で、そして残念ながら……

小日向まなみさんは、俺と同じ、ドM同士である。



『俺と同属嫌悪』（前書き）

前話よりやや短めのお話です。実質的なまなみさん登場シーンが少ない。

## 『俺と同属嫌悪』

『メールでいいので、なにか罵倒いただけるとありがたいです。』  
まなみさんから届いたメールに俺は嘆息する。用件もたいがいアレではあるが、なぜか授業で一度見たことのあるビジネス文書的なノリだ。いや、まあ実際俺が人に頼むとすれば敬語を使うだろうけれど、せめてメールでくらいあのクールビューティでDSだった小日向まなみさんでいてくれれば、もっと世界に対して優しくなれそうだ。とはいえ俺が世界に対して優しくなるより世界が俺に対して厳しくなってくれる方が良い。ああ、その意味でこの状況は俺のM度を試されているのかも知れない……と考えれば色々捗ってきそうなものではあるものの、この目の前の問題をどう片付ければいいのかということには、うーん……。

「だめだ。放置」

ケータイを閉じる。

そもそも昨日学校でメアドの交換まで済ませたのが間違いだっただけであれは踏み越えないほうがいい一線だったのだ。まなみさんの誤解をどこかで解かなければとは考えていたけど、結局状況に流されてしまった。

「ケータイ番号と、メルアド教えて」

と彼女は短く命じた。俺は命令口調にすこぶる弱い。理性よりケータイより先に身体が赤外線通信を始めんばかりの勢いで絶頂とともに個人情報流出。挙句、ここで断っておいた方が痛めつけられたりして無理やり聞き出されるんじゃないかという可能性まで真面目に検討してしまった。

その結果が、さっきのメールだ。

頭を抱えるしかない。しかし実はこのポーズをDSな女の子の前でやってみたい。こういう風なガラ空きの背中をどうにかして欲しい瞬間が訪れるのは月に三度や四度のことじゃない。精確に言うところ

日に三度から四度だ。

吐き出したため息が近づきつつある夏の熱気に溶かされた。

俺は何に悩んでいるのだろう。冷静さに支配されるほどこの状況の馬鹿馬鹿しさに気づく。俺はまなみさんに目をやった。こちらに気づかず一心で黒板を見つめる姿は、俺の理想であるクールビューティにしか見えなかった。

放課後になる。取り出さないようにしてたケータイを手に取ると、着信を示すランプが灯っている。

当然のように届いていたまなみさんからのメールを開けばそこに文章はなく、サムズアップの絵文字だけが燦然と輝いていた。

首を傾げているところに、また新しいメールが届く。

『放置プレイ、一級品。』

あー……。まなみさん相手にしたくない。

まだ教室にいるかと思って、辺りを見回すと教室の対角あたりに立つ彼女がこちらをうかがっていた。不安げなのかなんなのかよく分からないが結構鋭い目つきでこっちを見ていたので、思わず何らかの興奮度が高まりそうになった。

……。そう。まなみさんの性癖がドMだったとしても、彼女の持つ様々な素養はSに向いているのだ。だとしたら、俺がやるべきことはなんだろう。

古文ノートの片隅には『別冊 まなみさん女王様計画(MJK)』と書いてある。それを取り出して、少しだけ書き換えた。

『まなみさん女王様化計画(MJK)』

「よしっ」と軽く俺は気合を入れる。すると着信ランプが灯る。

『痛みをとまなう行為も厭いません。』

こちらを見て軽く手を振るまなみさんに、入れた気合が根こそぎ抜けた。

「……ということがあったわけですよ」

「ふーん。で、直樹ってほかにわたしに言うことはないんだ？」

家に帰ると妹のしずるにこれまでのまなみさんとの経緯を話すとともに言い訳をした。

「二日連続で帰るのが遅かった」

不満気にしずるは言葉をぶつけるけれど、その表情は拗ねているというより蔑んでおりやや心地いい。もっとも蔑む表情というのは俺に対して最も多く見せるものなので比較的慣れているというか、まあやや快感である。

「直樹ってさ、気持ち悪いよね」

「俺は結構気持ちいいよ」

「そーいうんじゃないかね……」

しずるを苛立たせた。ナイス俺。

「帰るのが遅かった理由は話した通り、変なドMの女の子に絡まれているから逃げ回っているうちについて感じさ。キモいよね、ドM」

「見ればわかる」

「ありがとうございます」

しずるは頭を抱えた。

「ムカツク……」

「蹴っていいよ」

突き出したケツは蹴りとはす足もなく寂しそうに我が家の廊下に佇んだ。

「だから、このクソ兄貴は」

「なんか迷惑かけてるよな。ごめん」

多少は本心が混じった言葉だ。大体四割くらい。

「分かっているならしっかりしてくれと助かるんだけど」

「努力するから御恩くれよ」

「やんないっての」

ほとほとめんどくさそうにしずるは言い放つ。

「放置プレイね。望むとこだよ。ああ、そういや、そのまなみっ子は放置プレイもいけるくさかったよ。キモいよね」

「知ってる？ 直樹の言うそれ、世間では同属嫌悪って言うんだよ知ってる。踏んでくれていいから足嗅がせて。」

「あつぶね」

「どうしたの？」

「話の流れに乗って本心を危うく喋りかけそうだった」

「こういう言葉、口にしてしまったら家族関係もそろそろやばそうな気がしてくる。」

「もういいや、ご飯炊けてるからさっさ食べよう。今日もママ遅い」

「ああ、そう」

しずるに続いてダイニングへと向かう。さっきは話を流しかけてしまったけど、同属嫌悪だって？ そんなことあるはずないじゃないか。本当に俺がまなみさんを嫌悪してるのだとすれば、だって、彼女に対してSのように冷たい態度も取れるということだろう？

「生粋のドMである俺に限ってそれはないよ……」

「変なこと言っていないで、夕飯の支度手伝えバカ！」

妹からしてみればドMでも兄貴でもなくなってしまうたらしい。

「ありがとうございます」

それでも罵倒には奉公で返そう。それが犬科の人間である俺の生き方だ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2753y/>

---

どえむどうし

2011年11月9日01時08分発行